

(トップページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(GCC: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/GCCgeneral.html>)

マイライブラリー:0199

2011.9.13

前田 高行

MENA 王制国家連合を目指す GCC(?)

(ヨルダン、モロッコの GCC 加盟交渉始まる)

9月11日、リヤドで開催された GCC(湾岸協力機構)外相会議にヨルダンとモロッコの外相が招かれ、両国の GCC 加盟が具体的に動き出した¹。問題の発端は今年5月にリヤドで開催された GCC 首脳会議で両国の GCC 加盟を歓迎する旨のコミュニケが発表されたことである²。その唐突さに世界が驚き憶測が飛び交った。

GCC(Gulf Cooperation Council)はそもそも1979年のイラン革命がきっかけで誕生した。パハレビ一王朝を倒したイランのホメイニ師はバーレーン、サウジアラビアなどペルシャ(アラビア)湾対岸に住むイスラム教シーア派住民を扇動し、君主制国家の打倒を叫んだ。バーレーンは住民の7割近くがシーア派で、それを少数派のスニ派ハリーフア王朝が支配する不安定な構図であり、サウジアラビアの場合は同国経済の命運を握るペルシャ湾沿いの油田地帯に多数のシーア派住民が居住している。GCC とイランはイスラム教の宗派の違いだけでなく、アラブ人とペルシャ人と言う民族の違いもあり、歴史的に常に緊張関係にあった。

このためサウジアラビアはクウェイト、バーレーン、カタール、UAE 及びオマーンに呼び掛けて1981年5月に GCC(湾岸協力機構)を結成した。各国君主の呼称は厳密に言えば国王(サウジアラビア)、スルタン(オマーン)、首長(クウェイト、バーレーン、カタール、UAE)。但しバーレーンは後に王制に転換と異なるが、いずれも絶対君主制国家である。GCC はペルシャ湾沿岸の君主制国家による地域連合であり、それゆえに「湾(Gulf)」の名称が冠せられたのである。

1990年代に入るとGCCは今度はイラクの脅威に晒される。クウェイトに対する領土的野心を抱いたフセイン・イラク大統領(当時)は、サバーハ家の圧政からクウェイト国民を解放するという論理にすりかえて同国を占領した(1990年)。これは国際社会から強い非難を浴び翌年に米国を中心とする多国籍軍によって駆逐されたが(湾岸戦争)、イラクの脅威は2003年のイラク解放戦争まで続いた。

GCC は周辺の大国の脅威から君主制を守るための政治・軍事同盟であったが、これ以降 GCC は経済同盟の性格を強く打ち出すようになった。それが域内関税の撤廃及び通貨統合である。このうち関税撤廃は実現したが、2010年の成立を目指した通貨同盟はサウジアラビアとUAEの対立により見通しが立たない状態である。

これまでの GCC は人口及び経済規模が圧倒的に大きいサウジアラビアの強いイニシアティブによって運営され他の5カ国は従順に従ってきたのであるが、近年 UAE がドバイの発展を背景に地域の経済センターとしての地位を確立し、またカタールはハマド首長の活発な外交活動とアル・ジャザーラの存在によりアラブ世界を超えて国際社会で名声を博すなど自立しつつある。このため両国とサウジアラビアの溝は深まっている。その結果 GCC 首脳会議の議題は加盟6カ国の利害が共通した問題、例えばアル・カイダなどイスラム過激派テロに対する治安対策或いは電力網整備のような個別具体的な経済問題に絞られ、GCC の将来像があいまいになっている感が否めない。

そのような中で今年初め突然中東北アフリカ諸国に改革の嵐が吹き始めた。いわゆる「アラブの春」である。チュニジア、エジプトでは政治の民主化、経済改革を求めるインターネットの呼びかけがたちまち国内を席卷しつつに政権崩壊にまで突き進むと、その動きはまたたくまにアラブ全域に広がった。君主制の国家も勿論例外ではなく GCC のバーレーンとオマーンに飛び火し、特にバーレーンではデモを鎮圧するためサウジアラビアと UAE が GCC 治安部隊を派遣する事態となった。またヨルダンとモロッコでも民主化と生活の改善を求める国民のデモが発生、国王は王権の制限を約束して国民の不満をやわらげた。現在これら君主制国家は小康状態を保っているが、いつ何時再び火を噴き出すか予断を許さない状況である。

オイルマネーで潤っているサウジアラビア、UAE、カタールなど GCC 産油国は「バラマキ行政」で一般国民の不満をそらせ表面上は平穏である。しかし各国にとってヨルダンとモロッコの王制が危機に瀕すれば明日は我が身である。両国に何らかのてこ入れを考えるのは当然であり、それがヨルダンとモロッコの GCC 加盟なのである。

GCC の拡大は関係国にどのようなメリットがあるのだろうか³。鍵はオイルマネーである。GCC 加盟によって資本と労働力の往来が自由化されれば GCC のオイルマネーがヨルダンとモロッコに流入する。現在 GCC には巨額のオイルマネーが蓄積しているが、サウジアラビアのように国内に投資機会がある国は別として、クウェイト、UAE、カタールなどは行き場のない資金がだぶついている。欧米に投資しようにも景気が低迷しリスクが高い。ヨルダンとモロッコには観光資源が多く、ホテルなど観光産業に対する投資は魅力的である。投資によって両国に雇用が創出され失業問題が解消すれば一石二鳥である。さらに GCC 諸国からの観光客が増え外貨収入が増加すれば一石三鳥である。また GCC 加盟によりビザの取得が容易になればヨルダンとモロッコからの出稼ぎが増加する。経済開発を進める湾岸諸国にとって安価で良質な労働力は魅力的であり、両国にとっても失業問題を解消し外貨を獲得することができる。

このように書くとヨルダンとモロッコの GCC 加盟は良いことづくめのように見える。しかし GCC のそもその設立趣旨に立ち戻ると今回の GCC 拡大は根本的な矛盾を孕んでいる。GCC を字義通り「湾岸協力機構」と言う地域共同体ととらえるなら、ペルシャ「湾」とは縁もゆかりも無いヨルダンとモロッコをメンバーとすることは殆ど意味をなさない。サウジアラビアの隣国ヨルダンならまだしも、遠く離れた北アフリカのモロッコを地域共同体のメンバーとすることは全く理解に苦しむ。

新たな拡大 GCC は「君主制国家」と言う共通項しかないのである。つまりアラブ諸国の中の数少ない君主制国家が連合体を組むと言うことである。この君主制国家群は果たして外部の何に対して結束するのであろうか。仮想外敵は国家ではない二つの「思想」上の敵であろう。一つは西欧民主主義思想であり、他の一つはイスラム過激思想である。かれらはこの二つの思想に対して自らの体制を守るために結束しようとしている。

現在の GCC は一枚岩ではない。UAE とカタールは国内の宗派对立が無く、イスラムテロの脅威も小さい。UAE は経済発展に専念することが国策であり、カタールは西欧諸国と歩調を合わせ政治・メディア・スポーツの面で自国のプレステージを上げることに熱心である。両国は拡大 GCC が王制死守を掲げてイスラム過激派或いは周辺の共和制国家と不要な摩擦を起こすことを内心恐れている。

ヨルダンとモロッコの加盟問題について各国の報道ぶりを読み比べると興味ある事実が浮かび上がる。サウジアラビアのメディアはこの問題を熱心に（時には派手に）取り上げ、オマーンがそれに追随している。その一方 UAE とカタールはことさら論評を避けているように見受けられる。両国は GCC 拡大にもろ手を挙げて賛同しているとは思えない。バーレーンとクウェイトは大国サウジアラビアに黙って従っているだけであろう。

今回の GCC 外相会議では加盟の行程表は示されていない。今年末に予定されている GCC 定例サミットで議論されるのであろうが、場合によっては加盟国間の議論が収束せず、通貨同盟と同じ道をたどる可能性も否定できない。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Arab News on 2011.9.12, 'Morocco, Jordan inch closer to GCC',
<http://arabnews.com/saudiArabia/article500539.ece>

² Arab News on 2011/5/11, 'Yemen parties urged to sign deal'
<http://arabnews.com/saudiArabia/article393663.ece>

³ Arab News on 2011/5/12, 'Divergent views emerge on GCC expansion plan',
<http://arabnews.com/saudiArabia/article396251.ece>